

を「先生々々」と呼んでゐた。

春太夫が末期の時、妻の梅園は死に直面した夫の顔を寫生しようとした、ふと眼を開いた太夫は「なるだけ男ぶりに描いてや」と注文した。（此畫像は攝津大掾家に所藏されてある）身の丈四尺一寸の着物を被た。六十一歳の還曆祝の時に袴を着て四斗俵をかるると差し上げたさうだ。

越路（攝津大掾）や大隅が、役不足で往々江戸へ奔らうとするのを克く看破して、江戸に就て學ぶべきの師なし、大阪でなければ本當の藝は磨かれないと、屢々訓戒を加へた、それで二人ともに遂に大阪に踏み止まつたといふ話もある。

## 六 風流染太夫（六代目）

自叙傳三十冊を綴る

寛政十一年生、明治二年四月三十日、七十二歳で死歿。三代長門の跡を繼いで文樂座の櫓下となる。越前大掾の門下。長門太夫、春太夫と伍して文樂座の重鎮、三段目語りの大立者。慶應元年櫓下に入つた時、薄雪のかけ腹で大好評。

時代物の名人で、温厚篤實、細心周到の性、自敘傳三十冊を残してゐる。當時の風俗、行事、時事の巷説、山水の景勝、旅行記事が趣味的に記されてゐて、自筆の挿畫や、高山植木の標本などを貼付してある。四代長門の淨瑠璃大系圖と對比して、これは隨筆的な興味に於て勝れてゐる。

器用な性だつたので、小細工物が巧みで、蟲履さきから貰つた金封や品書の目錄を、贈り主の名と共に切り抜いて、床本ほどの白紙の帖に貼りつけたのを保存してあつた。その帖末に金の總計が上つてあつて、これが三年目毎に一冊宛出来る、生涯の物は勿論數冊になつてゐる。永久に冥加を感謝する意から、これを作つたのださうだ。

## 七 山僧 三光齋

高野から轉向した

詳細はわからないが、高野の山から下りて來て太夫になつたのは事實。始め京都に出て素人淨瑠璃仲間て延玉と稱してゐた。大阪での初舞臺は文久三年三月、道頓堀若太夫の芝居で「猿曳門出諷」の堀川の段を語つた。體格が巨大で頗る美音、猿廻しは特に好評。二代目豊竹麓太